

302

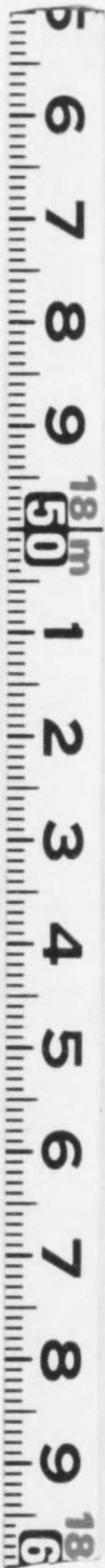
特 253

236

際思想研究所調査

印度は何處へ行く

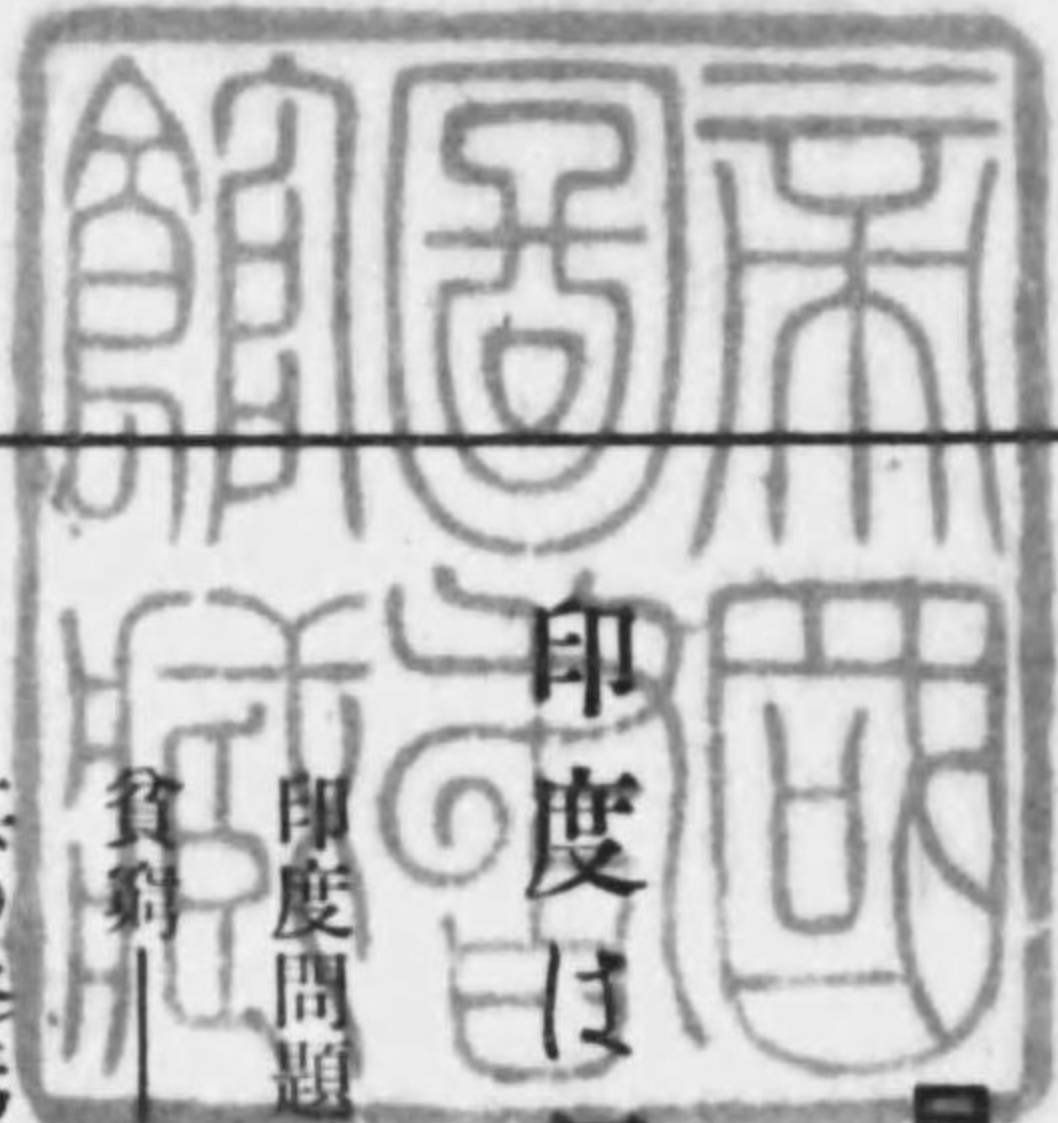
國際思想研究所版



始



特 253  
236



目次

印度は何處へ行く……………

印度問題の重要性——現實の印度——大東亞戰爭の影響——民衆の貧窮——蔣印合作工作と革命印度の動向——英國印度統治の實相と其の終焉





## 印度は何處へ行く

國際思想研究所調査

(日本の壓倒的なる勝利の下に、驚嘆に値ひする快速を以て進展飛躍を重ねつゝある大東亞戦争の全局面は、日を逐ふて米英の決定的なる敗色を濃厚にし、殊に老大廢殘の英國の姿がものゝ哀れをとどめてゐるが、最近に於けるシンガポールの失陥に次ぐ各方面敗戦の事實は、愈々米英を指導國家となす反樞軸陣營に蒼然たる暮色の迫り來れることを感せしめないでは措かない。かくてビルマ、濠洲も亦日ならずして皇軍の占據支配するところとなるべきは火を睹るよりもあきらかであるとするれば、究極に於て英國が最期の據點として斷末魔の餘喘を暫く保つてあらう世界は、印度以外に無いことゝなる。しかし乍ら其の印度も亦、内部情勢

は日毎に英國に取りて不利なる傾向を馴致しつゝあり、勢ひの赴く處、多年慘忍酷薄、非人道の限りを盡し來れる英國の印度搾取に終止符が打たれるであらうことは、最早時日の問題にしか過ぎないと見られてゐる。こゝに現實印度の動向が我々に取つて深き關心の焦點たるべき理由があり、即ち本稿はこの意味よりして本研究が最近各方面より入手せる信憑するに足る資料を基礎として編述せるものに外ならぬ。燦然たる東洋文化の歴史的榮光に耀く印度、そして世界最大の寶庫と呼ぶるゝ印度は一體何處へ行かんとするのであるか？ この疑問を解かんが爲には、我々は先づ印度の過去、現在、未來を大觀するところが無ければならぬ。

(既刊第三十八輯・印度獨立運動の近狀・參照)

## 一

三億五千萬の人口を有する佛陀の國印度は、いまや大東亞建設途上における極めて

重要な一大對象として、新らしい意義を有つて、我々の前に登場して來た。

現實の印度！ それはイギリス本國に取つて富の源泉であり、イギリス金權政治の最大の策源地として、有色民族搾取の惡辣非人道的な資本主義的植民地としての存在を續けて來たものであることは云ふ迄もない。そのイギリスの生命線としての印度がシンガポールに破れた彼國に取つて最後の抵抗基地として残されてゐるものであることも亦明らかである。即ち彼としては、こゝを本據として最期のはかない對日抵抗のものがきを示すであらうことが容易に推測し得られるのである。果然、最近の情報は重慶に孤城落日の嘆を發してゐる窮餘の蔣介石が、印度に飛んで蔣英合作に必死となつて狂奔してゐたことを傳へてゐるではないか。

そもゝ印度は、ヒマラヤ、ヒンヅウ・クシ兩山脈によつて區劃されるアジア大陸の半島部を形成してゐるのであつて、その面積百萬平方哩を超え、イギリスに取つて最も重要な人的資源地帯を構成してゐる。

顧みれば一六〇〇年イギリスが印度をその屬領にしてから、あらゆる機會と手段を以てこの尨大なる人的資源を動員し、いはゆる「黒人の血を以てアングロサクソンの安全を保つて來た」のであつた。事情かくの如くであるから、印度即イギリスといふも過言ではなく、印度を失ふことは取りも直さず大英帝國國防の一切の有機的機能喪失を意味する。こゝに今次大東亞戰爭における印度問題の重要性があり、而して戦局の發展に伴ふ當然の必要として我々の關心が今後一層この方面に集中されなければならぬ理由が存するのである。

二

ガンデイス、インダス、ブラア、マプトラ諸河の汪々として流れ行く豊饒な沖積土、また廣大で、その大部分が熱帶的氣候を有する印度が、農業國として世界に冠絶せる存在であることは尤も自然と云ふべきであらう。その農業經營方式は頗る原始的でし

たがつて甚だ非科學的であるに拘らず、農産物の生産高が世界屈指であるのは無盡藏な人的資源の動員が容易に爲されて來た結果であると謂はれてゐるのであつて、試みに一九三八、九年度の統計に見るも左の如き數字を示してゐる。

甘 蔗	五三〇萬トン	世界第一位
黄 麻	八六五萬俵	同
落 花 生	三三四萬トン	同
米	二、六七三萬トン	世界第二位
棉 花	五六六萬トン	同
煙 草	五〇萬トン	同
棉 實	二四〇萬トン	同
菜種、辛子	一〇二萬トン	同
胡 麻 子	四四萬トン	同
茶	四〇三、〇〇〇萬封度	同

この他になほ亞麻仁子の世界第三位、小麥及大豆の世界第四、五位をはじめ、ゴム

豆類、玉蜀黍、粟、珈琲、コブラ、阿片、藍、香料等々殆んど凡ゆる農作物をいづれも豊富に産出してゐる。また家畜は牛一億六千萬頭で世界第一位であり、山羊は三千六百萬頭でこれも亦紛れもなく世界第一位だ。其他水牛三千百萬頭、羊千五百萬頭、馬四百萬頭、駱駝一萬頭に上り、畜産國としても印度は裕に世界に傲視してゐるのである。

天然林に恵まれた印度は、イギリス當局の多年に互る植林政策の効果に依り愈々その繁茂を増しチイク、白檀等の有用材を多量に産出して現在においても木材年産一億トンの産出可能なりと云はれてゐる。

更に鑛業資源について見るに、この方面の開発は未だ充分に行はれてゐないにも拘らず、一九三七、八年兩年度の統計は既に左の如き數字を示してゐるのだ。

マンガン鐵	九六萬トン	世界第一位
雲母	八萬六千トン	同第一位

タングステン	三千トン	同第三位
鉛	八萬八千トン	同第三位
クロム鐵	三萬一千トン	同第四位
ニッケル	一千三百トン	同第四位
鐵	二七〇萬トン	同第七位
鉄	一五七萬トン	同第八位
石炭	二、八三〇萬トン	同第九位

この他なほ亞鉛、金、銀、銅、鹽等も相當の産出を見せてゐるのであつて、石炭の埋藏量六百億トン、鐵鑛六十億トンと推算されてゐる。

印度における工業は、第一次世界大戰勃發に依る英國製品の對印輸出の杜絶並に印度の軍需基地としての重要性が認識されたこと等に依つて漸次發展の傾向にあると謂はれる。

第二次世界大戰の勃發は、必然に印度工業の劃期的なる飛躍を招來するに到つた。

即ち昨年の秋、英帝國東半球屬領會議に於て、印度を中心とする軍需生産の擴充が議せられたことは英本國が印度を其の兵站基地として最も重視してゐる證據でなければならぬ。現在、印度の工業就中其の軍需生産は政府の積極的な協力に依つて加速度的増加を示し兵器、自動車、航空機等の各部門に互り著しい急速の進歩を遂げつゝある事實を見逃してはならぬ。思ふに英本國としてはいまや南方諸地域の原料資材供給國を次々に喪失しつゝあるのだから、この際唯一の方策として印度に據る以外將來の長期戦を續けることが出来ないことを充分承知してゐるのであらう。

## 三

今次大東亞戦争の緒戦に於て示された日本の壓倒的優勢と云ふ事實は、有色人種一般に非常な精神的影響を與へたが、中でも印度の民衆が受けた感動は大きかつた。「日本は遂に起つた。我々印度の民衆は、この際どうしても勇敢な日本民族を先頭に立て

之れと協力して英本國積年の慘忍酷薄非人道的な植民政策を全東亞から一掃することに最善の努力を盡さなければならぬ。」と云ふ考へが、沸々と印度全民衆の心に湧き起つたのである。この情勢を逸早く看取した英國は、周章狼狽の餘り其の傳統的な僞瞞政策を以て頻りに將來に於ける完全なる自治の實現を約束すると稱して印度民衆の歡心を買ふことに躍起となり、一方また印度人生産業者を督勵し労働者に對する報酬提償の好餌を約束する等種々の巧妙な手段を講じてゐるが、しかし既に相當覺醒の域に達せる印度多數の人々は最早かやうな英國一流のペテン政策には誑らかされないのである。

最近の印度産業界はヨーロッパ戦争に原因する物價騰貴の爲めに生活不安が日増しに深刻となり、同盟罷業が相次いで起り、各地に勞賃値上の要求がひろがつてゐるが之れに對する印度政府の政策は僅かに子供瞞しに類する勞働調査委員會の報告に基く改革案實施の程度にしか過ぎず、且つ其の常套的な高壓手段を以て強ひて之れを壓伏

せんとする傾向がある爲めに、結果としては徒らに大衆の反感を買ふ以外の何ものもない有様である。例へば一九三七年に新憲法を發布し、且つまた十一州中の八州迄國民會議派が政權を握つて、農民と労働者に幸福を齎らすことが約束されて來たのにも拘らず、事實は少しも改善の色さへ見えす、大衆の生活苦は依然として全印度の民衆が奴隸の境遇にあることに少しも變りがない。過去十年間の印度に於ける經濟的不況は、前世紀以來かつて經驗しなかつた程の農産物價格の大下落を來した。數年間印度の村落には地主、金貸し、極貧の農民群と云つたやうな不健全な階級的構成がハツキリと現はれて、おびたゞしい失業者の大群が、村から村、州から州へと悲慘な大移動を續け遂にそれが都會へ／＼と流れ込む變態的な傾向を盛んならしめてゐる。しかも政府はこの寒心すべき社會不安に對して何等の徹底せる對策も講じ得ないで不潔と饑餓貧窮と疾病が物凄い勢ひで擴がりつゝある事實は掩ふべくもないのである。

「生活不安が革命を生む。」と云ふことが一面の眞理を含んでゐるものである限り、

印度に於ける如上の經濟不安の實狀を見た者は、誰れでも現在のやうな英國の白人壓制思想を根幹とせる統治が決して求續するものでないことを悟るに相違ない。

## 四

印度民衆の貧窮狀態を如實に反影せるものとして彼等の住宅問題が擧げられる。印度へ旅した者ならば、何人も目睹したことであらうが、マドラス、ボンベイ、カルカッタ等の同國の大都市では、多くのみすばらしい装ひをした労働者達が舗道で食事をしたり、眠つたりしてゐるのを見受けるであらう。ボンベイでは十呎平方の一室に四人以上の人が雜居してゐることは珍しくないと云ふ。特に甚だしいのになると縦十五呎、横十二呎の一部屋に六つもの大家族三十人以上もすし詰めになつてゐるのだ。マドラスでは貧民窟が道路の下にあるので、豪雨の後では必ずみじめな水責めに見舞はれる。これが全印度を通じて見らるゝ労働者の偽り無き日常生活の情景なのだ。成程



大工場主等の中には、これ等の労働者に形ばかりの寄宿舎を設けて表面を糊塗してゐる者も無いではない。しかし、かうした微温的な一部の温情政策などが何になるであらうか？ 支配者たる英國人達の非人道的な搾取が廢せられない限り、印度人住宅問題の根本的解決は到底期し得られるものでないことが解るのである。過激な工場労働に疲れた體を憩ふに足る慰安設備もなければ、満足な栄養など無論與へられる筈もなく、唯是れ其日々々を街頭に打棄てられた野良犬同様に取扱はれてゐるところの彼等労働者達のやがて赴くところが、一時の逃避を酒や女や阿片に求める外なくなるのも無理からぬこと、云はねばなるまい。

印度にも労働組合はあるが、それは未だ現在のところ組織産業の労働者五百萬人に對し組合員の數僅かに三十萬人餘りに過ぎないのでから、組合そのものゝ資本家に對する力は極めて弱い。かうした事情の下にあつては、如何に組合があつても、ほんたうにその實力を發揮して労働者の福祉の爲めの施設を資本家乃至當局者に對つて要求

しても、その目的を達することは殆んど不可能に近い。英國の虐政が齎らす貧窮と無智、そしてその結果としての無力が印度の民衆を何時までもかゝる非文化の状態へと沈湎させて置くのである。

## 五

既に上述せる如く、最近の外電は英國のシンガポール失陥に依つて愈々その命脈を縮められつゝある蔣介石が、最後の活路を印度に求めんとする窮餘の策から印度に乗り込んで英軍當局と數次の折衝を重ねると同時に、印度國民會議派の元老たるガンヂーやネール一派の領袖達と頻々會見して、笑止千萬な抗日策謀に死者狂ひとなつてゐることを傳へたが、今更蔣如何にその奸腦を傾けかゝる狂的媚態を續けやうとも、一たび大河の決潰したる如き大英帝國没落と云ふ世界史的必至の情勢を食ひ止めるが如きは、固より思ひも及ばないこと、云ふべきである。時勢は移る、非武装不服従運動

を以て一貫して來たガンヂーや左翼思想の色掩ふことの出来ないネールの時代は最早過ぎ去つて、印度革命運動はいまや明らかに新らしい脱皮の時代に到達してゐるのだ。若い印度の先驅者達殊にその目前に英國没落の世界的事實をまざくと見せつけられてゐる今日の印度の進歩せるゼネレーションに取つては、もうかうした十年一日の如き無力な革命遊戯は堪えられないのだ。彼等は異口同音に云ふのである。

「我々の目前には、いまや千載一遇の印度民族復興の絶好機會が迫りつゝある。これこそ全東亞民族就中最も虐げられ輕蔑され野獸の待遇を受けて來た印度民族が、はじめて生命の歡喜と民族國家の榮光を謳ふべき時節が到來したものであることを知るべきだ。即ちこの大自覺の下に、我々は一切白人支配者特にその代表的國家たる英國との妥協を排し、先達たる日本國家の鐵の如き指導に従つて祖國印度の更生と飛躍の爲めに全努力を注傾しなければならぬ。……今日の印度は、もうガンヂー翁やネールの印度ではない。彼等は最早過去の人物となつた。若き印度人は

これ等の偶像的存在に頼ることなく、他迄歴史の必然たる時勢の變化に順應して進むことが唯一の残された道であることを確信を以て斷言するに躊躇しない。樞軸諸國例へば獨逸や日本にゐる同志はいまや一齊に風を望んで蹶起しようとしてゐるのだ。殊に日本にゐる我々の血盟の同志達は、その絶對優勢なる日本軍の庇護の下に、今後最も大膽機敏なる行動を執り得る便宜を有してゐるのだから、その活躍は恐らく遠からずして世界を震撼せしむるに足る新情勢を造り出すに相違ないのである。」

自信に満ちてかく云ふ印度革命志士達の面上には、千萬里と雖も我れ往かんの潑刺眞摯な氣概が溢れ、百折不撓の大精神がありくと看取せらるゝことは頼もしい限りである。

「東條首相も云つてゐる如く、「數千年の歴史と光輝ある文化の傳統とを有する印度も亦今や英國の暴虐なる壓政下より脱出して大東亞共榮圈に参加すべき絶好の秋である。帝國は印度が印度人の印度として、本來の地位を回復すべきことを期待し、その

愛國的努力に對しては敢へて援助を惜しまざるものである。』から、彼等印度人達が日本のこの眞意を誤りなく諒解し、我が皇軍の威武と協力して印度民衆自らの反英運動を積極的に推し進めて行くならば、彼等が多年仰望してやまなかつた民族國家としての獨立がはじめてその緒につくに相違ない。勿論、そこには最後まで英國の未練執拗な抵抗が續けられるであらうことは容易に想像し得られる。故に印度人としては、その獨立の舉は何處迄も自主的で唯單に日本に頼るといふだけでなく日本と聯繫して全東亞より米英資本主義勢力を驅逐一掃すると云ふ態度に出なければならぬ。

印度獨立運動は皇軍のビルマ攻略に依つて正しく新段階に這入つた觀がある。いまや老翁なる英國は三億五千萬の印度民衆とその富力とを反樞軸戰線に動員すべく、或は自治をにほはし、また蔣介石を動かして印度反日化の工作に乗出さしむる等必死となつてゐるが、それは結局印度を戰爭に引すり込み印度人の血の犠牲を提供せしむることに依つて滅び行く英國の没落を喰ひ止めんとする彼一流の利己的な窮餘の政策に

他ならないのである。しかし乍ら、現に親蔣的なりと云はるゝ印度國民會議派と雖も果してかやうな英國の畫いた巧妙な芝居の筋書通りに躍るや否やは疑問だ。「印度の戰場化」は全印度人の欲せざるところである。唯彼等としてはこの機會に彼等が積年の念願たるブルナ・スワラジ（完全なる獨立）を齟らすして獲得せんとする熱望に燃えてゐるのが事實であるから、恐らくは今後大東亞戰局の進展に伴れて獨立運動の火の手は益々熾烈を加へて行くであらう。

英國の對印政策は從來如何なる場合に於ても「印度民族保護」の美名に藉ることを忘れない。かくて僅かに六百人の英人官吏と約二萬の英國軍人に依つて永年に互り三億五千萬の印度民衆内の人種、宗派間の軋轢を巧みに利用し之れを操縦することに依つて、其の統治を續けて來たのであつた。印度の政黨、團體と稱するものは現在五十餘に上つてゐるが、その中で最大の勢力は國民會議派である。同黨は急進派スパーヌチャン・ドラ・ボースの歐洲亡命以來、ガンヂー、ネール、アザツク等に依つて指導

されてゐる。國民會議派に次いで有力なものに全印度回教聯盟があるが、これは從來對英協調に依つて黨勢擴張に汲々としてゐる有様であるから、その言動は動もすれば印度民衆多數の反感を買ふ傾向がないでもないと謂はれてゐる。

印度の現状はかくの如く獨立前夜の混沌を極めてゐるが、しかしこの混沌の中からも既に世界新秩序の一翼としての新印度建設の雄叫びは高く上つてゐるのだ。在獨逸のボース一派及東亞共榮圏内に散在しつゝも本國と密接なる連絡をもつ印度革命志士達の最近の活潑な動きは何よりもこれを證明してゐるのである。これ等の幾つもの動きが將來客觀的情勢の必然の影響を受けて次第に統合され、有力なものとなつて行く時、そこにはじめて新印度の鐵の如き秩序建設が期待され、獨立印度の明日の姿が我々の前に展開される秋があるであらう。

## 六

英國の印度統治はいまから百八十餘年の前に溯る。即ち一七五八年英國が愈々世界の寶庫印度にその積極的侵略の食指を伸ばし彼のロバート・クライブをベンガル地方英領知事に任じ、次いで一八五八年英國政府は東印度會社より印度支配の全權利を譲り受け、そこに名實共に大英帝國東亞侵略の本據としての植民地印度が完成された。爾來三世紀の長きに亙り、英國の印度統治は全くの歴史と搾取の白人共通の有色人種蔑視觀念に基く暴虐の歴史が繰り擧げられたのである。

現在印度の政治機構は、第一次世界大戰直後、幾多の英印紛争を繰返した結果として、「サイモン現地委員會」の報告を基礎とし三回に亙る「英印圓卓會議」に依つて出來上つた新統治法を一九三七年四月一日から實行してゐるものであるが、この新統治法の基礎をなすところの全印聯邦の結成に當り、會議派内に於ける漸進派と急進派の軋轢、回教徒と印度教徒との對立、封建制度を固持する土侯等各々異なる立場より反對の聲を擧げ、遂に一九三九年十月英國側から聯邦制の無期延期を聲明した爲め、現

行政機構は實質的には依然として一九一九年の舊統治法に依つてゐる。而してかくの如き印度民族内部の混亂紛争の状態こそは、英國に取つては寧ろその思ふツボであるのであつて、かうした内部の微妙な政情を充分承知した上で巧みに之れを操り、そこに英國獨特の功利的な統治効果を期待してゐるものと見ねばならぬ。抑々一九一九年の舊統治法なるものは、印度議會並に州政府を認め、表面或程度の自治を許容してゐるかに見えるが、その實は印度總督なるものが廣汎なる権限を驅使して印度人官吏の蔭にあつて巧妙に彼等を操縦してゐるのだ。即ちそれは何處迄も英本國本位に出來て居り、大多數の印度人を貧窮の境地に置くことに依つて、彼等の知的進歩を阻みその革命的志操の生長を幼芽よりつみ取らうと企んでゐるものに外ならぬ。

現行印度の行政機構に於ては、全印度を中央政府に直屬する英領印度十一州と、土侯領六百餘に分けてゐる。而して之れが統治機關としては、英本國に於ける印度統治機關に於ける其れとがあり、英本國にては英内閣の一員たる印度事務大臣と之

れに直屬する印度參事會なる輔佐諮問機關を置き、また印度にては印度中央政府、各州政府、地方自治團體があり、土侯領に對しては別に印度總督に隸屬する英人駐在官を派遣して事實上其の行政權を掌握してゐる。

印度總督の地位は頗る高い。彼は「副王」又は太守とさへ呼ばれ、英國王の任命にかゝり、その任期は五ヶ年、その權能は英國王の代理、英國政府の代表、印度中央政府の最高首腦者と云ふ三位一體の文武統治の絶大なる権限を行使してゐる。この總督の輔佐機關としての參事會は七名の會員より成り、之れには軍事、内務、財政、商務法制、教育保險、土地、産業勞働各部の長官が就任してゐるのである。

次に印度の立法機關であるが、これは上下兩院より成る「印度議會」であつて、上院の最大限定員六十名、下院の最小限定員百四十名、その過半数は民選で、上院議員は任期五年、下院は三年となつてゐる。選舉資格は極度に制限されてゐるから、印度の總人口三億餘萬の中投票權を有する者は未だ五百萬人に過ぎないと謂はれる。官選

半分、民選半分と云ふところである。かやうな實狀であるから立法機關とは名のみであつて議會の權能は極めて弱く重要法案等に就ては總督の内諾を得ない限り如何なる法案も之れを議會に提出することが出来ない。また英國としては其の政策上異民族、異教徒達の反目を維持する便法として、人民層の習慣または宗教に關する法案も總督の内諾無き限りは議會に提出すること不可能と云ふことになつてゐる。

之れを要するに現實の印度統治なるものは印度總督の獨裁政治と云ふも誤謬ではなく、それは濠洲や加奈陀に於ける總督の如く單なる英國王の代理ではなく、重要政務は總て其の獨裁に依つて決定されるところに特殊性、隨つて英國に取つて印度統治の重要性が存することを知らなければならぬ。

一體英國の植民地統治の根本策としては、その功利主義的思想より出發せる「名よりも實をとる」といふ陰險狡猾なる傳統政策を以て一貫して居り、この方針に基いて彼は現に印度民衆を釣るに形式的な「印度聯邦制」の好餌を以てし、其れに依つて如

何にも完全なる自治を印度に與へるもの、如くに吹聴してゐる。殊に印度の危機が愈々目前に迫つて來た今日に於ては、英國として最早やこの方法以外に離れ行かんとする印度民衆を引き留め懐柔するの術が無いに相違ないのであつて、最近に於ける英本國內の輿論も大體これに傾いてゐることに注目しなければならぬ。

三月三日のロンドン・タイムス紙は言ふ。

「印度と重慶は對英關係に於ていまや全く新しい段階に入つた。英國は飽迄印度及び重慶と協力し、將來の政治的事態を解決することに努めなければならぬ。印度は國內の反對派の爲め分立の状態にあり、これが解決には多くの困難を伴ふが、今後も從來の如き微温的な政策を續けて行くと云ふならば其れは大きな誤謬を冒すものである。英國の指導者階級は、これまでの印度に對する態度を根本的に修正する必要がある。」

これは恐らくタイムスの記者だけの考へではなく、現在英國に於ける有識階級の多くの人々が抱いてゐる悲痛な見方と云ふべきであらうが、併し今更英國民達が窮餘の

423  
418

政策として如何に肝膽を砕いてかやうな印度人に對する速製の媚態を呈しようとも、それは到底大東亞戦争を契機として澎湃として捲起りつゝある印度民族獨立の大波濤をせき止めることは不可能であらう。凡ては時の勢ひの然らしめるところと云ふべきだ。會議派内部の小訃や宗派間の軋轢など云ふやうな部分的な出來事も、やがてはこの時勢の大潮流に自然と押し流されて、大英帝國の印度支配が其の慘憺たる終焉を告ぐるの日もさして遠い將來でないことが想はれるのである。(完)

昭和十七年三月十四日印刷  
昭和十七年三月十八日發行

(非 賣)

著 者 水 島 齊

印 刷 人 東京市麻布區籠筒町六七 糸 川 東 洋 男

印 刷 所 東京市芝區三田四國町二ノ二五 嘉 屋 印 刷 所

發 行 所 東京市淀橋區柏木一ノ四八 國 際 思 想 研 究 所

電話淀橋(37)一七二〇番  
振替東京三三〇一一番

終

